

氏名(本籍)	志賀市子(茨城県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第1,612号		
学位授与年月日	平成9年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	「道壇」の歴史民俗学的研究 —近代香港・広東地域における扶乩信仰と道教—		
主査	筑波大学教授	文学博士	平山和彦
副査	筑波大学助教授		佐野賢治
副査	筑波大学助教授		妹尾達彦
副査	筑波大学講師		古家信平
副査	筑波大学助教授		池上良正

論文の内容の要旨

道壇とは、近代の広東および香港において、道教の風土のうちで成立した宗教集団であり、扶乩（広東語でフーケイ、北京語でフーチイ）という「自動筆記」が行われるところに特色がある。扶乩は、乩手によって沙盤の上にかかれた文字または記号をもって神の乩示、すなわち託宣と見做すもので、乩示を媒介にして神と人との交流が成就するという一種のシューマニズムである。本論文では、扶乩信仰と道教との関係を軸に、民俗宗教としての道壇の実態を歴史民俗学的に分析・考察することによって中国社会の宗教研究に新たな道を切り開こうとするものである。本論文は序章・終章を含めた9章と、添付資料、写真、参考・引用文献から構成されている。

序章「中国民俗宗教研究の再検討と本研究の目的」では、従来中国の宗教がエリート／民衆、成立宗教／民間信仰といった二分法的枠組みで捉えられがちであったことに対し、実態にはそうした二項対立の図式では把握できない領域があることを例えば道教と民間信仰、とりわけシャーマニズムを例に指摘する。そして本論の目的は、その媒介領域に成立する宗教現象に焦点をあてることで実証することにある、とする。さらに、道壇を同じ道教系の「廟」と対比し、廟が固定的な信者組織をもたないのに対し道壇は自発的入信者による教団を形成し、道教の神々の中でも特に呂祖（呂洞賓）を信仰すること、また扶乩を中心にさまざまな年中行事や儀礼を執行するとともに、さまざまな慈善事業を展開している点を挙げる。なお、著者が把握した香港とマカオの道壇教は36団体で、19世紀半ばに成立したものが最古である。ついで道壇に関する研究史、香港の人口、宗教の概況が紹介される。

第一章「扶乩信仰の特質—香港の広東系華人の扶乩を中心として」では、現代の扶乩を観察することで、乩手の意識はごく軽い催眠状態だと見る。しかしトランスを意識の変容状態だと広義に概念規定することにより、扶乩はシャーマニズムの一形態として捉えられるという。さらに、扶乩の原型ともいべき民俗が広西、広東、湖南一帯に古くから存在したこと、宋の時代ごろから科挙をめぐる文人の間でも行われるようになった歴史が跡付けられる。また現代香港の21名の乩手に面接することにより、乩手の学習やその動機などについての聞き取り調査の結果が詳細に紹介される。

第二章「扶乩集団における神と人」では、香港の一道壇を参与観察することで、乩示の意義と作用を個人と集団の両面から考察する。個人については数名のライフヒストリーから「入道」のシステムを、集団については乩

示にもとづく意思決定法について追求し、乩手の人格は問われず、乩示の比重が大であることを明らかにする。また当該の道壇に発生した対立と分裂の経緯を跡付ける。

第三章「都市社会香港における道壇の社会的機能」では、香港の一道壇を中心に、その活動や事業を考察。それらが民俗宗教活動のための宗教センターとしての役割を果たしていること、とりわけ喪葬儀礼では道壇の収入源として重要な位置を占め、伝統的ではあるが蔑視される職業道士に対し、道壇の儀礼担当者である「経生」という信者が進出し、アマチュアリズムを強調する論理を展開することで、職業道士に対する優位性、正当性を示そうとしている、という。

第四章「道壇の信仰史的背景—清代広東と道教と呂洞賓信仰の諸相」では、8世紀末に出生したとされる伝説上の神仙呂洞賓に対する信仰が、商品経済の発展とともに揚子江水系の都市を中心に広まった歴史を考察する。呂洞賓信仰はとりわけ薬商になわれ、漢方薬の生産が発達した珠江デルタ地域のうち広州に広く浸透したのである。また本章では、最も早期に成立した道壇・雲泉仙館が考察され、そこには文人サロンの伝統が継承されていることを指摘する。

第五章「19世紀末都市の道壇—善堂と善書運動を背景として」では、都市の発展につれて現出したさまざまな社会問題—たとえば失業者、貧困者、難民の発生と増加等—に対処するべく成立した善堂の歴史について概観する。都市中間層の間から発生した道壇のメンバーの中には、善堂の設立者も少なくなかったし、道壇もまた善堂としての機能を果たしていったのである。19世紀末、善堂的な道壇成立の直接的契機はペストの大流行によるものであった。また、倫理道徳をうたった善書発行の流行もまた道壇の発生に寄与している。第六章「民国期の呂祖道壇—大衆の宗教倫理意識と『道教』への接近」では、1936年に広州市の郊外で結成された信善堂という道壇について、設立者たちの子や関係者からの聞き書きと文献史料をもとに、成立の過程や、乩示を通じての呂祖との交流の内容を考察する。設立時のメンバーは9名で、いずれもごく普通の若者であり、扶乩を試みた動機は遊び心であったが、呂祖が降臨したことにより、信者となったのである。また彼らが乩文の一部を手書きでまとめた書物から、彼らの宗教倫理を分析している。

第七章「道壇の成熟とさらなる展開—香港・広東地域の戦後史を踏まえて」では、道壇が日中戦争のあいだは活動の停滞をよぎなくされていたこと、戦後は新政府の成立という事情もあり、広東地域の道壇が香港に集中し再出発したこと、そして1980年代からは北京の白雲觀との交流を開始したことなど、そうした経緯を先の信善堂とその後身団体を中心に跡付けている。その間に現出した事態としては、「教团的道壇」への成熟、社会福祉政策の進展による難民救済事業の縮小、「伝統的」道教への接近、意思決定における扶乩の後退といった諸点を指摘している。

終章「近代香港・広東地域における扶乩信仰と道教」では、扶乩信仰は道壇の核ともいべき位置を占めていたが、それは道教と対極にあるものではなく、むしろ広範な道教知識へと導かれる「入口」であったこと、また発生段階から道教をめぐる社会通念に規定されていた道壇は、文人道教徒への憧れと一方での喪葬儀礼専門道士への優位性といった振幅を経ながら、しだいに道教への接近の度を強めていると結論づけている。さらに道教への接近は、香港社会におけるprestigeを高める意図と、1997年以降の体制変化での生き残りを図る戦略的手段だとする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、従来エリート／民衆、成立宗教／民間信仰のごとく二分法的に捉えられることの多かった中国の宗教を、民俗宗教という概念を用いてその中間領域に焦点をしばり、具体例として道壇を挙げ、扶乩というシャーマニズムを中核とする道壇と道教との関わりについて考察したものである。本論文の特筆すべき成果は、①中国宗教研究のうちでも特に方法論、および道教とシャーマニズムに関するアメリカ、中国、日本における研究史を

丹念に跡付け整理したこと。②香港における道壇を長期にわたって調査し、一道壇の成立過程を綿密に復元したこと、また道壇の扶乩を中心とする諸儀礼をつぶさに観察し記述したこと。③乩示を文字化した記録を入手し、その内容を分析考察したこと。④道壇等の善書を蒐集し、そこに記された倫理観を分析考察したこと。⑤呂洞賓信仰が、商品経済の発展とともに揚子江沿岸の都市を中心として展開したこと、および道壇が中国のうちでも商品経済が早期から発展した広州の、特に都市部で成立し、その担い手は主に都市中間層であった事実を明らかにしたこと。⑥道壇が、増大する難民や貧困者の救済事業を展開し、特に喪葬事業で大きな役割を果たしてきたこと、等である。

しかし問題がないわけではない。著者は道教を成立宗教として狭義に捉えているが、近年の日本ではすでに広義に捉える行き方もあり、その点を踏まえたとえでの筆者の論理が十分には展開されていないこと。そのこととも関連し、著者なりの民俗宗教の概念が必ずしも煮詰められているとはいえないこと。扶乩および、乩示の理解において、著者はそれが単なる乩手の無意識的な意識の反映としてのみ前提的に考え、宗教現象としてのメカニズムにまでは考察が深められていないこと。道壇におけるリーダーシップの所在に関する考察がみられないこと、等である。

本論文には残された問題はある。けれども未だ調査・研究の両面において不十分であった道壇とその核としての扶乩を、実地調査と文献の双方から綿密に考察した研究として本論文は高い価値を有するものであり、学界への貢献は大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。